

新収蔵作品 武石弘三郎《裸婦浮彫》、北村四海《女性立像》について

伊澤 朋美

平成24、25年度と2年続けて大理石彫刻の寄贈を受けた。両作品の基礎情報を整理し、また平成25年度に行った両作品の洗浄修復について報告する。

1. 武石弘三郎《裸婦浮彫》

《裸婦浮彫》(図1)は平成24年度に受贈した作品で、縦96.0×横75.8×厚さ9～13.0cm、重量およそ160kgの大理石レリーフである。右下には「K. TAKEISHI. KIGHÉN 2599」とサインと制作年が銘記され(図2)、武石の作品であること、また紀元2599年=1939(昭和14)年の作であることがわかる。武石弘三郎の基礎資料である『彫塑家・武石弘三郎ノート』(註1)には、年毎の制作作品を列挙した巻末資料「武石弘三郎作品年表」が掲載されているが、当作品はそこに記載が無く、その意味では新出の作品と言える。作品にはもともとタイトルはつけられておらず、収蔵時に《裸婦浮彫》というタイトルを付した。

座る裸体の女性が胸元に手をあて、見上げるようにして微笑む様子が表されている。女性のモデルは不明である。女性の背後には植物が浅く彫られている。新潟県立植物園・倉重裕二氏の指摘によると、女性の頭部横に咲く花は、葉の形や花の基部にある苞がよく似ていることから、インドハマユウなどのハマユウの仲間ではないかということである。(註2)また女性の左右にわたってケシが咲き広がる。背景に浅く植物を彫り込む武石の浮彫例としては、1935(昭和10)年作の鑄銅レリーフ《中村震太郎・井杉延太郎純難慰霊碑》(行方不明)等が確認できる(図3)。人物の顔の立体感を強調する作りも共通する。また大理石レリーフという点では、万代島美術館高主任学芸員が調査した、李王家東京邸内のレリーフが確認されているが(註3)、現存例はほとんど無く稀少である。

武石弘三郎(1877 [明治10]～1963 [昭和38]年)は、新潟県長岡市(旧：南蒲原郡中之島村)出身の彫刻家である。東京美術学校では長沼守敬に師事し、卒業後はベルギーへ留学、ブリュッセルの王立アカデミーで塑造を学んだ。帰国後は《松本順・石黒忠憲像》をはじめ、《森鷗外像》など、軍人、政治家、博士など著名人の肖像彫刻を数多く手掛け、設置例は全国に及ぶ。

当作品は、新潟県三条市の繁華街にあたる本町通りより少し離れた場所に位置する、



図1 武石弘三郎《裸婦浮彫》



図2 サインと年記



図3 武石弘三郎《中村震太郎・井杉延太郎純難慰霊碑》(行方不明) (『彫塑家・武石弘三郎ノート』[註1]より)

(註1)

佐々木嘉朗『彫塑家・武石弘三郎ノート』(1985年、北日本美術)

(註2)

同氏によると、戦前の日本であればインドハマユウは珍しい植物であったという。留学先のベルギーで実際に見た、あるいは典拠となる図像があったかと想像される。また、女性の右足下には丸い葉を持つ植物などが見られ、多様な植物が彫り込まれていることがわかる。

(註3)

高晟峻『旧李王家東京邸内の武石弘三郎作大理石浮彫について』『新潟県立近代美術館研究紀要 第11号』(2011年)

「若松」という料亭内に設置されていた(図4)。現在若松は取り壊され、現存しない。若松は、平成21、22年度の2か年にわたり三条市が実施した「中心地歴史的建造物調査」で調査されており、そのときにすでに当作品が確認されている(註4)。



図4 「旧料亭若松外観」【田村収撮影 長岡造形大学提供】(『三条市中心市街地歴史的建造物調査報告書』[註4]より)

同調査の報告書によると、当作品が設置されていたのは、昭和5(1930)年頃創建とされる母屋に増設された、洋室である。洋室は、主屋西側にある玄関から客溜を経て、先にある廊下を東へ進むと、廊下北側に位置するが、廊下の板戸を閉めると、そこに部屋があるのがわからない仕組みになっており、隠し部屋となる。洋室の北側壁面中央には暖炉があり、《裸婦浮彫》はその上に絵画のように飾られていた(図5)。



図5 「洋室 南西より」【田村収撮影 長岡造形大学提供】(『三条市中心市街地歴史的建造物調査報告書』[註4]より)

筆者も建物取り壊し前に、現地にて設置状況を確認したが、作品は壁面に埋め込むように設置され、壁紙の剥がれた箇所から、作品左右側面に彫られたほぞに木材を差し込むなどして押さえつけていたことがわかった(図6)。また作品には専用の木製額が付属し、作品との接地面は作品表面の凹凸に合わせて削られており、額と作品が密着するよう工夫がなされている。

洋室は、当作品が制作された1939(昭和14)年頃に、設置と併せて増設されたと考えられている(註5)。当作品は、その特殊な形状からも、おそらく当初からこの場所に据えることを前提として制作されたと推察される。洋室の増設と当作品の設置については、県外より竹中工務店を招いて行ったという(註6)。



図6 洋室内での設置状況

隠し部屋では政治家たちが出入りし、密談を交わしていたという、いわくつきのエピソードが残るが(註7)、所有者の聞き取りによると、当作品は、当時の料亭主人の結婚を記念し、武石に制作を依頼して手に入れたものであるという。なぜ武石が選ばれた

のか理由は定かではないが、若松には新潟県三条市出身の工芸家・広川松五郎(1889[明治22]~1952[昭和27]年)による天井装飾を備えた和室があり、県出身の作家を積極的に起用しようという意図があったのではないかと想像される。東京美術学校を卒業したばかりの広川に、森鷗外を紹介するなど、武石と広川は同郷人として、また美術界の先輩・後輩としても交流があった(註8)。

(註4)

三条市市民部生涯学習課「旧料亭若松」『三条市中心市街地歴史的建造物調査報告書』(2011年) p.154

同じ調査の報告が、平山育男／西澤哉子「旧料亭若松について 三条市中心市街地の町と町家の調査研究その8」『日本建築学会北陸支部研究報告集(53)』(2010年、社団法人日本建築学会)にも掲載されている。また、上記調査報告をもとに『ぶらぶら 三条市中心市街地歴史的建造物 みてあるき』(2011年)リーフレットが三条市同課から、発行されている。

(註5)

前掲註3「三条市中心市街地歴史的建造物調査報告書」p.155

(註6)

前掲註4「三条市中心市街地歴史的建造物調査報告書」p.155

(註7)

所有者聞き取りによる。また、前掲註3「ぶらぶら 三条市中心市街地歴史的建造物 みてあるき」p.31にも同様の記載あり。

(註8)

前掲註1「彫塑家・武石弘三郎ノート」p.140

公共空間等に設置される肖像彫刻を多数手掛けてきた武石の作例からしてみれば、当作品は異質な存在であるが、ベルギーで習得した堅実な作風が見て取れるだけでなく、県内に現存していた貴重な作例として価値のある作品であることは間違いない。地元新潟との繋がりなどの観点からも、研究を進めていきたい作品である。

2. 北村四海《女性立像》

平成25年度に受贈した、北村四海(1871 [明治4]～1927年 [昭和2]年)作《女性立像》は、横幅28.5×奥行24.5×高さ60cmの大理石彫像である(図7)。半裸の女性が樹木のような柱に軽くもたれかかっており、右手をその柱上に置く。特徴的なのが、女性が長い髪を背からぐるりと腹部まで回している点で、何か典拠があることを想起させるが、定かではない。柱下部前面に「大正十五年 四海」(図8)と年記とサインがある。四海が1927(昭和2)年に没していることを考えると、最晩年の作品とすることができる。作品にはもともとタイトルはなく、収蔵時に《女性立像》というタイトルを付した。



図7 北村四海《女性立像》

当作品は、安田銀行社長をつとめた園部潜(1882 [明治15]～1945 [昭和20]年)旧蔵であることがわかっている。その後、園部の遺族が邸宅内で保管してきたもので、これまで公の場に出ることのなかった新出作品である。

北村四海と安田とのつながりは、1896(明治29)年の日本美術協会展にまでさかのぼる。四海は1871(明治4)年長野県長野市(旧：水内郡長野町)に生まれ、1876(明治9)年に新潟県糸魚川市市振(旧：西頸城郡青海町市振)に移っている。次第に四海は宮彫師である父の仕事を手伝うようになり、父に連れられ新潟はもちろん富山、長野と各地で宮彫の仕事に携わった(註9)。いつしか西洋彫刻に関心を持つようになった四海は、東京の展覧会への出品を始め、1896(明治29)年の日本美術協会展に神武天皇をモチーフとした、《木彫神代馬乗人物置物》を出品する。この作品が安田銀行創始者・安田善次郎(1838 [天保9]～1921 [大正10]年)の目にとまり、買い上げられることになった。さらに善次郎は「勉強をするならば面倒をみてあげよう」と声をかけ、上京した四海は、その後安田家の敷地内に空家を借り、研究に励むことになる。



図8 年記とサイン

なぜ善次郎が四海の作品に目をつけたのだろうか。四海は日本美術協会展に「越中・北村四海」の名札を付けて作品を出品し、それが富山出身の善次郎の目にとまったという、興味深い逸話が残る。このことについては、当時各地で仕事をしてきた四海がたまたま越中(富山)にいたときに、例の馬上人物像を作ったので、「越中」としたという説、

(註9)
新潟県上越人物史研究会『新潟県人物百年史 頸城編』(1967年、東京法令出版) p.167

(註10)
長谷川達雄「信州・鬼無里で出会った『安田善次郎坐像』」『松蔭会会報 No.83』
1994年

(註11)
柳井康宏「北村四海《手古名》の修復・再展示に関する提言」『慶応義塾大学アート・センター年報(1999/2000年度)第7号』(2000年、慶応義塾大学アート・センター) p.11

(註12)
北村正信「四海餘滴」(1929年、大塚巧藝社) p.17
「父が始終感謝してゐましたのは、安田本郎はいふに及ばぬことでございますが、ここ御一門の十一名ばかりで、佐々木秀司様などの御世話によつて後援の作品頒布会を御起し下さり、最後まで続けて頂いたことであります」とあり、このような会が何度も行われていたことがわかる。

(註13)
「千駄木のお屋敷 旧安田楠雄邸へようこそ」(2010年、たてもの応援団) p.14

(註14)
前掲註12「四海余滴」 p.17～18

(註15)
有限会社ブロンズスタジオ「保存修復記録書」[武石弘三郎《裸婦浮彫》](提出:2014年3月31日)
有限会社ブロンズスタジオ「保存修復記録書」[北村四海《女性立像》](提出:2014年3月31日)

また四海の拠点であった新潟の市振は、地理的にも文化的にも越中に近いという感覚があったのではという説もある(註10)。同郷の香りを感じ取ったのか、いずれにせよ善次郎は終生にわたり四海を支援し、四海はこの恩に応え、フランス留学後は西洋大理石彫刻の先駆者として活躍していくことになる。

柳井康宏氏によると、四海の作品は3つのグループに分けることができるという(註11)。
①特定の顧客の注文によって制作された肖像彫刻作品のグループ、②安田家や慶應義塾の関係者を対象にした頒布会を通じて不特定の顧客に売却された作品グループ、③展覧会出品のために制作された作品のグループである。これに従えば《女性立像》は②の群に属する。②には比較的コンパクトな作品が多いという特徴も一致する。当作品を園部が入手するに至った経緯だが、遺族聞き取りにより、次のようであることがわかった。当時(1926年頃)、安田の役員や関係者が四海の資金援助のために彫像を購入することになった。園部は二つの彫像から一つを選択することになり、五男一女の子供のことを考え、全裸ではなく布を纏った像を選んだという。全裸像がいかなる像であったかは定かではないが、安田関係者が四海の作品を購入するなどして、支援をすることがあったようである(註12)。

東京都文京区にある旧安田楠雄邸所蔵の《陽炎》も、1924(大正13)年に安田家が購入したことがわかっている作例である(註13)。大理石の半裸の女性立像である点、サイズなども当館の《女性立像》と近いものがあり、先述のグループのうち②に属することは明らかである。四海と安田の関係は、善次郎が1921(大正10)年に亡くなった以降も続いた。

1926年(大正15)年には《勤儉堂安田善次郎座像》(図9)というブロンズ小像232体が鑄造され、安田関係者に配られたという。晩年の四海が生涯支えてくれた安田の恩に報いるような作品を残したいという思いを持ち、安田関係者の力添えもあり、実現を果たすこととなったようだ(註14)。



図9 《勤儉堂安田善次郎座像》
〔四海餘滴〕〔註12〕より

この善次郎坐像の制作年は奇しくも《女性立像》が制作された年と同年である。安田との関係が非常に深い年に《女性立像》は作られた、と言うこともできるだろう。当館には既に《空想に耽り居る女》(1916[大正5]年)、《すみれ》(1920[大正9]年)、2点の四海による大理石彫像を所蔵している。ともに文展出品作のバリエーションであり、安田との縁深い《女性立像》が加わることで、四海の作品世界がさらに広がるのが今後期待できよう。

3. 武石弘三郎《裸婦浮彫》、北村四海《女性立像》の洗浄修復について

受贈時、両像とも経年による汚れが付着していたため、平成25年度、有限会社ブロンズスタジオに両像の洗浄修復を同時期に依頼した。下記にブロンズスタジオによる『保存修復記録書』(註15)より、作業記録を抜粋して掲載する。

●作業記録

修復期間：2014年2月5日～3月18日

修復実施・記録：有限会社ブロンズスタジオ 高橋裕二／篠崎未来

武石弘三郎《裸婦浮彫》

- 1 保存修復作業前 開梱確認 現状撮影
- 2 洗浄テスト
- 3 精製水・電解水によるクリーニング
- 4 作業終了撮影



図10 武石弘三郎《裸婦浮彫》(洗浄前)
(['保存修復記録書』[註15]より)

北村四海《女性立像》

- 1 保存修復作業前 開梱確認 現状撮影
- 2 洗浄テスト 精製水
- 3 精製水によるクリーニング
- 4 洗浄テスト エタノール
- 5 エタノールによるクリーニング
- 6 電解水によるシップ(汚れ吸着)
- 7 精製水によるクリーニング
- 8 細いニードルによる鉛筆線の除去
- 9 作業終了撮影



図11 武石弘三郎《裸婦浮彫》裏面
(['保存修復記録書』[註15]より)

武石弘三郎《裸婦浮彫》は、女性の顔、手脚、背景の草花などの凸部や、画面に向かって右上の空白部分表面などに汚れが目立っていた(図10)。精製水と電解水によるクリーニングを行い、状態が改善された。また修復時の作品移動の際、作品裏面に「上部」と文字が書かれていることがわかった(図11)。

北村四海《女性立像》は、全体的な汚れだけでなく、女性の頭部、胸部、腕の上向き面に特に黒色の汚れが目立っていた(図12)。武石作品と同様に精製水と電解水によるクリーニングを行ってもらったが、上向き部分の汚れに、エタノールのみでのクリーニングが効果的だったという(註16)。また、汚れにより見えにくくなっていたためか、目鼻の輪郭や髪の毛の流れ、指、衣文に沿って鉛筆で汚れの上から線が引かれていたことがわかり、細いニードルで除去した。

上記作業により、両作品とも鑑賞に堪えるまで状態が改善した。

両作品に関して長岡造形大学・平山育男氏、小杉放菴記念日光美術館・迫内祐司氏にご教示いただきました。また園部潜のご遺族からは、四海に関する貴重な資料を提供いただきました。

新潟県立植物園・倉重裕二氏には、専門的な見地から示唆に富んだご指摘をいただき、またブロンズスタジオのスタッフの皆様には、両作品の展示方法などについても、ご助言をいただきました。この場を借りて感謝申し上げます。



図12 北村四海《女性立像》(洗浄前)
(['保存修復記録書』[註15]より)

(註16)
ブロンズスタジオ高橋裕二氏談。

(新潟県立近代美術館 美術学芸員)

